

初期明治法律学校と地域および学生

——佐藤琢治を中心に——

鈴木 秀 幸

はじめに

本稿には2.3人の人物が登場する。2.3人の内の0.3人分は私（筆者）である。とはいえ私は紹介に値する人物ではないことは誰もが認める。だが、日々それなりに生きてきて今あることも事実である。私は地方の農村に生まれ、地元の小中学校、そして町場の高校に通った。その後、東京に出てきて大学（おまけに大学院）に入った。卒業後は高校教師となった。都立の定時制課程1年、埼玉県の私立学校2年、同県の公立学校16年というのが、その内訳である。より正確にいうなら、そうした傍ら細々と大学の兼任講師をしてきた。こうしたことは取り立てて言うほどの事ではないが、自分の事として振り返ってみれば私の人生の半分は学生（児童・生徒も含め）であり、半分は学校教員であることが分かる。私は常々、こうした自分史をいつかは教育史研究に役立てようと考えていた。つまり被教育者であり、教育者でもあった自己の体験を教育史の研究に役立てたいと思っていた。

こうした方法に対して批判の声が聞こえてくる。特に大きな響きは「君の生きてきた時代と分析対象の人物のそれとは違う場合がほとんどではないのか」という大合唱である。確かに時代的な社会背景を重んじなければならない。またそれに基づいて時期区分をする必要もある。それも単なる制度的な区分けではなく、国際社会から地域生活まで、あるいは政治から文化の分野までといったように総合的、構造的かつ有機的に規定していかなければならないといったことも多少は心得ている（最近刊行された、木村礎編著『村落生活の史的研究』の中の拙稿「ある農家の三代」という節や「明治30年代文化論」といった項目はこうした問題を意識して綴ったものである。いささかなりとも参照していただければ幸いである）。

だが一方、「日本の場合、今日のような教育が成り立ってからわずかであり、根っからまるで大きく変わったわけではないからそうした方法は可能だ」という賛同の意見も聞こえる。特に教育の歩みの中で、いつの時もありうる共通の課題、あるいは身近な現実的な問題というものには逆に、現在（自己）から振り返って照射してみると、はっきり描ける場合もある。少なくとも

も執筆者の問題意識はかなり明確になる。まして分析の対象がはるか以前の出来事ならともかく、ひとサイクル（近現代）・ふたサイクル（近世）程度であるならば、それは可能である。いずれにしても、学生はもちろん教員の経験があり、教育文化史研究に関わっている私がこれからより明るいあかりを持って、明治前期の2人の人物を描く（それが全部の章節に及ぶかどうかはわからないが）。つまり本稿はそれが直接活字になろうとならなかつと現在及び自己から当時および古人を照らし、歴史を描く。これが本稿の特色のひとつである。

ところで社会的な背景や状況に留意するということは、当然、天下・国家を対象とする。だが、一方では地域（地方）的なことも対象としなければならない。そのことは中央や都市部にある大学の歴史を扱う場合も同じである。ましてやそうした学校に在学した地方出身の者を扱う場合はとくに考慮しなければならない。しかもこれからは大学史研究であったとしても地域（地方）に歩を運んで調査しなければならない。本稿ははたして関係する地域を細部にわたって踏査できるとは思えないが、極力現地や現場の実態に即して論及してみたい。それが本稿の特色の第2点である。

すでに述べたように、この論文では明治期の2人の人物を分析する。なぜ2人なのか。それは簡単にいえばひとりの人物だけでは普遍化しにくいからである。さりとて多勢では集約し難いからである。一論文で2・3人程度を考察するなら扱いやすい。とにかく本稿は小論文ながら、2人の人物を対比することにより歴史を見極めたい。以上が本稿の特色の第3点目である。

さて、問題は上記のような分析の方法によって大学史（高等教育史）の何を解明していくかということである。以下、課題点を簡条書的に列記してみる。

1. どうして高等教育（義務教育ではないもの）を受けようという気になったのか。つまり上級学校へ進学する契機・動機・雰囲気を知りたい。そしてなぜ、その分野の学問に興味を持ったのか。なぜ、東京等へ行かなければならなかつたのか。なぜ、その学校を選んだのか。つまり勉学上の選択（専攻）の理由を探りたい。
2. その学校で何をして、どのように学んだのか。学校内ではどうか。学校外ではどうか。つまり学生生活の実情を一瞥したい。
3. 在学中に学んだこと、得たことをその後どのように生かしたのか。あるいは校友として母校にどのように関わったのか。つまり卒業後の動向を一覧したい。
4. 前述のことに対して学校当局は経営者として、教育者としてどのように応じたのか。つまり学校側の対応についてかいま見たい。

本稿では以上のうち、1～3について扱い、4については別稿に譲る。

1. 明治期青少年の進学動機

19年間勤めた高校教員時代、私が日々、接する生徒について、とりわけ苦悩したことがいくつかある。その最たるものがなぜ彼らは高校に進学しようと思ったのか、とくになぜ義務教育ではない学校（少なくとも制度上は）に入学しようとしたのかという単純素朴な疑問であった。簡潔に言えば高校進学の本質ということになる。このことについて生徒の本音を聞くのは難しい。高校入試時の面接試問（「志望の動機は何か」等）や入学後のガイダンス時の作文（「高校3年間にしたいこと」等）といった類のことではとてもわからない。

ここではとりあえず、以上の現実的問題を念頭にごく幕末から明治期の人物として佐藤琢治なるものを紹介していく。彼は文久3（1863）年1月に、現在の宮城県登米郡登米町（当時は登米村）の自邸に生れた。同人の進学事情を追究するためには登米地方について紹介しなければならない。同地は県北東部に位置する農村地帯である。ただ、それだけではなく一定の町場を形成していた。それには訳がある。ひとつはこの地が江戸期には仙台藩領であり伊達家一門が邑主としてあったからである。琢治の幼少年時代には邦教が支配した。また東端を大河川の北上川が貫流している。この大河は時には洪水を引き起こすこともあったが、一方同地を交通の要衝と化した。これらについて、ここでは吉田松陰の逃避行記『東北遊日記』における嘉永5（1852）年3月15、16日の一部を紹介する。

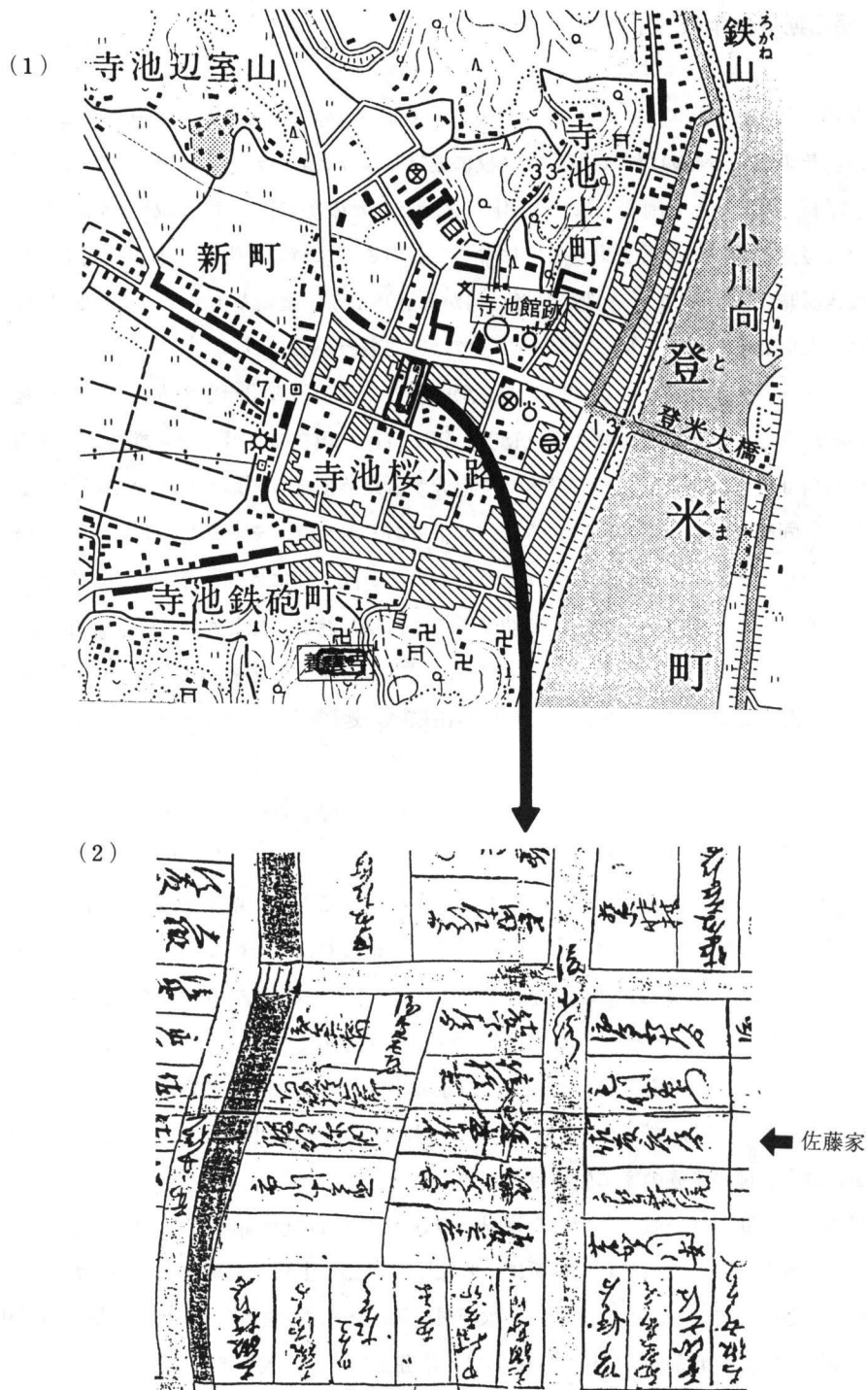
十五日 黒沼を経て登米に宿す、伊達式部の采地なり、祿二万石、家臣頗る多し、式部の第は高敞の地に拠り、塹堦之を環る（略）

十六日 驛、駅を發す、船にて北上川を濟り、川に沿ひて下り、柳津に至る（略）

佐藤家屋敷は「登米居館並家中屋敷図⁽¹⁾」（第1図）によれば、その城館からはさほど遠くはない。同絵図によれば同家は後小路に面した一角であり、「佐藤彦左衛門」の名が記されている⁽²⁾。かといって、同家は伊達氏居館に隣接したり、ごく接近しているわけではない。また広大な面積を有しているわけでもない。しかし伊達家の世臣であった。父は弥衛門といい、琢治はその次男であった。長兄は鷹之介（豊村）といい、のちに佐藤家を世襲した⁽³⁾。このように佐藤琢治は地方の中心地の士族の家に生まれた。

明治期になって間もない頃の登米村の景況について、『仙台日々新聞』（明治13年2月13日）は戸数は1500ほどあること、そして維新により家臣等は悉く土着して農業に従事したために資力があることを報じている。また同地には水沢県庁等、各官衙が設置された。小学校の様相について、同14（1881）年5月27日付の『陸羽日々新聞』は「結構大」であり、生徒は300余名も在学していることを記している⁽⁴⁾。琢治はその登米校に入学し、卒業した。ここで確認しておきたいことは登米の士族は他の場合と比較して急速に没落することはなかった。またこの時期、

第1図 登米村地図〈(1)現在 (2)幕末〉



(注) ・ (1) は国土地理院発行25000分の1地形図「登米」(昭和60年9月発行)を拡大し、加筆した。

(2) は「登米居館並家中屋敷図」(作成時期不詳、東北大学附属図書館蔵)。

この地域は政治経済はもとより文化的にも恵まれていた。おそらくこの状況と、さらに武家としての伝統やプライドが、琢治を勉学の方向に向かわせることとなったのであろう。平たくいえば琢治を修学へと向かわせる環境や条件や雰囲気は彼の周りにあったといえよう。

当然、彼自身の能力とかパーソナリティといったものもあった。例えば「幼少ヨリ学ヲ好ミ郷里登米小学校ニ入り優等ニテ卒業⁽⁵⁾」という文言から学才のほどがわかる。また次男という立場は実力で生きて行かなければならなかったが、反面居住地や職業選択に余地が長男よりはあった。

そうした琢治の個人的資質も立場も認めなければならないが、かなり取り巻く状況や条件に左右されたことは以下の事実からもよくわかる。その例証として登米校の内容面・質的な面について、教員に焦点をあててかきまゐる。明治14年5月27日付の『陸羽日々新聞』は同校について「校長は近藤氏にて授業も可なり行届き生徒も奮励の模様見ゆ」という記事を掲載している。この近藤校長とは名を親民といい、号を巨溪や恥堂といった。仙台藩校養賢堂等で学んだ後、江戸の古賀茶溪の門に入ったが、事情により東北地方を講説して歩いた。後に宮城師範学校を卒業し、小学校教育に当たった⁽⁶⁾。琢治はこの者に普通学ではなく経史を学んだ⁽⁷⁾。そのことからすれば、むしろ鯖名武治ら村内有志により設置され、近藤親民を教師に招いた夜学校で教養を受けたと思われる⁽⁸⁾。このようなことから登米村は「兼々学事は出精なる村⁽⁹⁾」と評された。琢治を取り巻く当地の教育文化は質的にも高かったといえる。それによって、琢治は幼少年時代、基礎学力をつけていった。というよりも地域により育てられていった。

その後、琢治はさらに高度な学問を習得するために登米よりはさらに学文の盛んな仙台に行く。とりあえず仙台をめざした理由は登米が仙台藩領ということ、そしてなにより同地は東北の中心都市である。

正確な修学期間は定かではないが、仙台において彼は国分平、そして服部友徳に就いた。前者は江戸期には仙台藩儒として文教や民政に活躍し、維新後は家塾を主宰したり、宮城県会議員や宮城中学校教員などを歴任した⁽¹⁰⁾。琢治はこの家塾で経史等を学んだ。後者は岡山藩士であり、易理に詳しい儒者である。仙台、あるいは登米地方を講説して歩いた人物である⁽¹¹⁾。その他、彼は仙台の漢詩人今泉篁洲等と親しく交わった。このようにして彼は東北の中核都市において中等の学力を身につけた。

そして、いよいよ彼は高等教育、専門教育をめざして明治16（1883）年、20歳の時、東京の明治法律学校へ入学する。ところで、なぜ東京をめざしたのか。逆に言えば、なぜ仙台では事足りなかったのか。明治19（1886）年4月25日発行の『宮城教育会雑誌』第16号には同年3月13日現在の「通信講学会各学科会員一覧表」が掲載されている。同会は東京下谷区の開発社を本部事務所とする。その受講者のうち、宮城県の場合を見ると計222人にのぼり全国第5位である。いかに東京など大都市部の学芸に地方の人々が飢えていたかがわかる。

次に第1表により東京の各私立学校在学者数と仙台出身者数の内訳を一覧する。同表は明治17（1884）年10月19日『仙台義会雑誌』第1号に掲載された記事に基づいて作成したものである。それによると、明治法律学校在学の仙台出身学生は計19人、第2位である。のちの同21（1888）年12月10日発行の『時論』第2号は宮城県の学生にして東京に遊学するものが明治13、14年の頃の幾十倍、約300～400人という数字を弾きだしている⁽¹²⁾。宮城県からも陸続と東京の学校めざして上京してくるさまが彷彿（ほうふつ）される。

第1表 東京各私立学校在学生徒総数および仙台出身学生内訳
明治17年10月19日雑誌掲載

校 名	学 科	生徒総数	内仙台学生
明治法律学校	法 律	408人	16人
同 分 舎	法律（原書）	31	3
東京法学校	法 律	350	2
専 修 学 校	法 律 経 済	340	8
慶 應 義 塾	英 学	260	5
成 立 学 舎	英 学	280	27
仏 学 塾	仏 学	70	3
二 松 学 舎	漢 学	250	4
進 学 舎	独 逸 学	30	2

（注）『仙台義会雑誌』第1号所収「私立学校在学生」より作成。

問題は当時、仙台には高等教育機関が存在しなかったのか、ということである。そのことは『陸羽日々新聞』が明治15（1882）年11月16日（第1611号）より5回にわたり「陸羽専門学校設立ノ議」を社説にて面々と訴えていることからわかるとおり、存在しなかったのである⁽¹³⁾。

さて、次に琢治はなぜ法学をめざしたのかということである。当時、全国青少年らが法学をめざす経緯と状況については基礎的研究として中村雄二郎「草創期における明治法律学校」（『法律論叢』別冊）、手塚豊『明治法学教育史の研究』（『手塚豊著作集』第9巻、慶應通信、1989年3月）あるいは天野郁夫『旧制専門学校論』（玉川大学出版部、1993年2月）等の研究がある。要するに法律は「近代化」の象徴であった。ただ、彼の法学志望理由を当時の社会風潮に求めるだけでは不足である。もっと現実的で、身近な個人的な理由、家庭の事情あるいは地域の問題等が横たわっているということではなかったのか。例えば私がなぜ大学の文学部史学科を選択したかといえば第1の理由は理系より文系の科目、特に社会科のうち歴史の分野がいわゆる「得意科目」であったこと、第2のそれは高校の部活動で「社会科研究部」に所属していたからである。佐藤琢治の時代はかなり天下国家を意識した立身出世観が旺盛であったとはいえ、彼はまだこの頃は地方にいたのであり、かつ若年であった。さらにやはりことのきっかけというものはより身近な必要感からうまれるということも考え併せなければならない。そうで

あるとするならばやはり琢治の場合は維新时期登米村の土地払下げ事件を取り上げなければならぬ。この一件は官有地払下げをめぐる官と民の戦いである⁽¹⁴⁾。この熾烈な争いを鎮めていったのは結局、法律であり、おそらく琢治は自宅で育った頃に、あるいは仙台から帰省の折にこの事件顛末を直視したであろう。それだからこそ彼はのちに自分の主宰する雑誌にこの一件を詳細に報ずることができたのである。

また明治10年代を中心とした自由民権運動は琢治ら若者を法律学習へとあおりたてることになった。ことに彼の郷里登米郡は同運動が盛んであった。幾つかの例をあげる。赤生津に明治14年9月、設立された一志社は登米村の小学校長島原太が中心であり、おもに法律を研究した。佐沼に同年10月に結成された公愛会では民権校長西大條規が刑法を講義した。また登米村に同年に結成された登米青年会、あるいは同16年に設立された東北社の学習・討論の内容は定かではないが、当然法律のことに触れたはずである。さらに琢治の従兄弟である首藤陸三（後述）は宮城県内最初の民権結社鶴鳴社（明治11年10月、仙台に設立）の設立・運営に携わっている。むろん同会でも「立法権ノ事」とか「国法論」といった法律のことも議論されている⁽¹⁵⁾。既述のように同社が設置された仙台は琢治が中等教育を受けたところであるが、この都市は東北における民権運動のメッカであった。

本項の最後に琢治がなぜ明治法律学校を選んだかという問題について考えねばならないが、次項で最初に扱うこととする。

2. 明治法律学校と学生・佐藤琢治

そこで琢治の明治法律学校学生時代について、まず（1）なぜ明治法律学校を選んだのか、（2）どのような学生生活を送ったのか、という2点に分けて考察したい。

彼が明治法律学校を選択した理由はやはりそこが法律を教えるところであった、というのが素直な解釈である。彼も当初は法律関係の専門職をめざしたのであろう。

では次になぜ他の法律学校ではなく「明治法律学校」だったのかという疑問がわく。それについては琢治自身には思い詰めるほど深い理由はあまりなかったと思われる。当時とても、新聞・雑誌等に明治法律学校の広告がしばしば掲げられたのでそれを目にしたのであろう。また同校の学費は高い方ではないので、経済的事情も考慮したのであろう。さらに学力が適合しそうだと思った程度であろう。もう少し明治法律学校に対する琢治の志望意識が強く高かったとすれば、明治法律学校は代言人ら司法関係者を多く輩出する学校として著名であったから選択したということであろう。

問題は琢治を明治法律学校へ導いた客観的条件（環境、雰囲気）である。例えば明治19年11月27日『仙台日々新聞』広告には「仙台明法学社」が掲載されている。同社は東京美土代町の

明法学社の分社であり、代言局のみならず法律私塾としてフランス法学を教授していた⁽¹⁶⁾。そうしたフランス法学の教育を担うために東京に創立されたのが高等教育機関としての明治法律学校である。この明治法律学校には多くの仙台出身者が在学していることはすでに数字を示した。その人物例として岩崎惣十郎をあげる。彼は地元の仙台で田代進四郎に就いて法律を学んだのち、開校まもない明治法律学校に明治14年、入学、同16年に卒業した。そして大阪区裁判所判事補に任ぜられたが、まもなく帰郷、仙台にて代言人として活躍した⁽¹⁷⁾。こうした明治法律学校の在学者や卒業生の存在も琢治らに大きな影響を与えた。

さて明治16年に入学した彼はどのような学生生活を送ったのであろうか。上京後、彼は仙埕義会の会員となった。同会は明治13（1880）年に設立された。幹事の鈴木綱介は琢治と同じく宮城県出身であり、明治法律学校生であった（同17年11月卒）。会誌の『仙埕義会雑誌』創刊号（明治17年10月）の例言には「文章ヲ蒐集シ學術討究ヲ以テ目的トス」としているが、発刊の旨趣欄には「仙台人ノ親和ヲ計ルニ外ナラサレハ政治上ノ主義宗教上ノ信仰ニ依テ離合スヘキニアラス」と謳（うた）っている（政治等に関心を持つ者はいたのであろうか）。つまり仙台出身の在京学生を中心とした親睦・意見交換団体である。同誌は毎月1回発行されているが、編集人は油井守郎である。油井は明治法律学校の学生であり、明治17年に卒業したがしばらくその任に当たった⁽¹⁸⁾。

その後、琢治は急速に学業としての法律以外の分野、とりわけ政治・経済、あるいは思想に関心を寄せていく。と同時に学内よりも学外の者との交流を深めていく。明治17年10月18日には東京南葛飾区向島に住む民権家の若林美之助宅に出向き、石坂公歴らと読書会を結成した。同会は政治・経済等の翻訳書を輪読することを目的としたが、彼はケーリーの『経済学』を担当した⁽¹⁹⁾。

だが、翌18（1885）年に筆禍事件により投獄される。その経緯について、「佐藤琢治履歴」より引用する。

一 明治十八年東京在学中学友山口俊太ト共ニ勉学ノ余暇民権ノ自由ヲ唱ヒ詩歌論文建白書等印刷セシヲ通信録ト題ス売買ヲ禁ス各自ノ間配布セシヲ時ノ政府嫌疑新聞条例違反トシテ石川島ニ監禁刑ノ不当非法ヲ陳述書ヲ時ノ大審院長玉乃世履ニ奉リ不問時日ヲ送り刑期限却下ノ不幸アリ
〔ママ〕

以上のことから次のことがわかる。琢治は上京後、学校で法律を学ぶかたらわ県人会的・親睦会的な学術団体に加わっていた。そしてよりレベルの高い広い教養を身に付けようとして読書会の結成に参加した。やがて彼は政治に関心を寄せ、同輩と文芸・政論半々の団体を結成、雑誌を刊行した。しかし、不慣れと「若さ」のため権力の餌食となったのである。

前掲史料中の「山口俊太」は別名畑下熊野ともいう。琢治よりも一歳年下で元治元（1864）年11月11日に紀伊浦沖（現在の和歌山県東牟婁郡智勝浦町下里）の医師山口俊道の長男に生ま

れた。和歌山県医学校卒業後、さらに大学医学部をめざして上京、この時は大学予備校に学んでいた。しかし進路を変更し、政治運動に奔走した⁽²⁰⁾。彼は明治16年1月15日には『青年思叢』（神田区の青年社発行）を編輯兼印刷長として刊行した実績はあったが、それは和歌などを含めた学術雑誌の性格が強かった。だが自由党に入党することにより日夜、関東・東京一帯を演説などをして歩くようになった。例えば自由党関係紙『自由燈』により政談演説会の記事に目を通すと彼の名前が頻繁に登場する。ちなみに明治17年の場合は12回ほどである。そして翌年、佐藤琢治と共に扶桑政談社を起こして、雑誌『通信録』を刊行したのである。この時点では彼の方が琢治よりも「政治青年」であったが、それでも雑誌刊行も政治的立ち回りも未熟であったわけである。

もっとも琢治もその『自由燈』や『自由新聞』に多少関わるようになっていたことは獄中仲間であった宮崎夢柳が同19年出獄後、琢治の兄へ送った書簡によって知りうる⁽²¹⁾。出獄後の同年5月、琢治は求友会のメンバーとなった。同会は東京在住の青年らによる政治・思想の情報交換会である。また地方会員との連絡も会務としている。彼は郷里宮城県の担当者として本郷湯島天神町の下宿等から連絡をとった⁽²²⁾。ところで彼は誰と、なぜ連絡を取り合ったのか。前者の疑問、すなわち琢治が交信の相手とした宮城県の人達とは民権運動家、特に自由党関係者である。それは例えばかつて琢治が登米や仙台にあったころの知り合いや仲間である。彼は明治15年10月、若者により東北青年懇親会が結成されたとき、発起人の一人として参加している⁽²³⁾。また、その人達より先輩で、すでに仙台で名が知られだしており、のちに自由党々友として共に闘うことになる草刈親明、あるいはそれより若い岩崎惣十郎（前出）や佐藤清らである。

次に、なぜわざわざ郷里と連絡をとったのかという点である。その理由について容易に考えられることは組織上のこと、つまりオルグである。今ひとつは思想・意識に関わることである。まとめて言えば、彼も思っていた「東北主義」との関係である。実はさきの東北青年懇親会は明治15年10月5日付『陸羽日々新聞』の会誌に『東北青年自由新誌』の刊行の広告を出したことがある。その趣旨の中に「奥羽文運ノ振ハサルヲ慨キ（略）大ニ真理ヲ拡張シ専ラ東北七州ノ面目ヲ一新」することを強調している。後述するが琢治は明治23（1890）年に仙台において政論誌『民報』を創刊する。そして、その第5号（同年5月）より第11号（同年10月）において「東北策」と題する社説を力を込めて書く。その要旨は専制主義の薩長藩閥政府に東北七州の県民は連合して自由主義を旨として対抗して行かなければならないというものであった。

このようにしてみると、佐藤琢治は明治法律学校に在学しながら、同校とはあまり関わりがなかったように思われる。実際、彼の学業に関する資料は見出せない。しかし、すでに述べたように明治法律学校はフランス法に立脚している。それにより「権利自由」を標榜する同校は自由民権運動の巢窟となる。よって官からは露骨に敵視されるが、方針や経営を曲げなかった。そのことに関しては渡辺隆喜「明治法律学校と自由民権運動」（『明治大学史紀要』第

1号),あるいは既刊の『明治大学百年史』第1巻(資料編I)・第3巻(通史編I)に詳しい。それらの書に紹介されている退校証明書の件,すなわち同校が政談演説会等に参加する学生に対し,出発する際,退学証明書を発行し,帰校すると復学させるという学生保護措置は琢治も受けたであろう。いうなれば明治法律学校は仕官(エリート)をめざす東京大学のような類ではなかった。ゆえに,そこに惹かれる若者は本人が意識しようと,しまいと自然に同校に集まったのである(当時の東京大学はまだのちの東京帝国大学ほどの威力をもっていたわけではない)。しかも結果として,琢治らの「東北主義」という東北人奮起論は,薩長を中心とするエリートの学校(東京大学等の官学)ではなく非エリートのそれ(明治法律学校等の私学)へ結びついたのである。しかも,明治法律学校の場合は東京専門学校や慶應義塾のようなひとりの人物の強烈な主義や思想に限定されるものではなかった。それゆえに琢治のような学生でも同校では在学を許容されるのであった。琢治にすれば机上やテキストによって得ることも大きかったであろうが,明治法律学校のもつ特色,方針あるいは校風から得ることはそれ以上であったといえる。

3. その後の進路

佐藤琢治の名は明治法律学校々友名簿『校友規則並表』に搭載されている。その時期は明治26(1893)年6月である。彼は10年かかって同校を卒業したのであろうか。しかしよく見ると彼の欄には「注」なる印がついている。それは推薦校友を表すものであることは,同校々員(経営者)『決議録』(第1号)⁽²⁴⁾にある「佐藤琢治(略)校友常議員ノ進達ニ依リ校友ノ身分ヲ特許スルコトヲ承認ス」という同年12月30日の記事からわかる。このことは以下の経緯・事情と大いに関係がある。徐々に民権家として名が知られた琢治は明治20(1887)年12月,保安条例の適用により追放となった⁽²⁵⁾。彼はやむなく名古屋に移り,『新愛知』新聞の記者となった。同紙第1号(同21年7月5日)には「自由半狂生 佐藤琢治」という名で「親愛知の発行を祝す」という一文を記し「平民主義の拡張」を力説している。

そして,このころ彼は明治法律学校を退学したのであろう。というのもこの時期には彼自身,政治一辺倒となっている。そして生業を得るため仙台に帰り,政治関係のジャーナリストとなる。すなわち前述したように,彼は明治23年2月より雑誌『民報』の発行をする。同誌の刊行の目的は「自由主義」,特に「東北主義」の啓蒙・普及であることはすでに述べた。刊行の終期はわからない。目下のところ同24(1891)年5月(第20号)までの刊行が認められる。ただ,もう少しあとまで刊行された可能性がある。それは同年10月の『自由党々報』(第1号)には自由党中央通信所(仙台)を民報社に仮設し,琢治らが事務に当たることが記されているためである。

なお、この年11月、兄の鷹之介（豊村）が病死した。したがって彼は兄の長男斐太を嗣子として佐藤家を継いだ。だが彼は全てを整理して生家の登米に帰るということはしなかった。このようなアクシデントに見舞われながらも彼はそれまでの実績をもとに明治25年、地元登米郡から宮城県会議員選挙にうって出た。この選挙は吏党と民党との対立、民党同士の改進黨と自由党との反目、さらに中立派も加わり激戦を極めた。自由党系の琢治は特に『東北日報』に同25（1892）年2月16日（第2号）以来、連日、攻撃のキャンペーンをはられた。しかし8月、当選することができた。

当選後、彼は政治方面でさまざまに奔走している。当然、県議会でも活躍しているが、明治25年12月の同会では、吏党系新聞『東北新聞』掲載の県会は「一場ノ蛙合戦」なりという記事に憤慨している⁽²⁶⁾。

また県内各地の演説会に弁士として出席した。例えば同年10月には刈田郡白石町で14日、次いで29日と2回も政談演説をしていることから、その精力ぶりがうかがえる⁽²⁷⁾。いうまでもなく、彼の生地である登米郡登米町へも出向いた。時期は前後するが明治24年9月3日、同町に板垣退助や河野広中らを招いて政談演説会を挙行したのは琢治らの力による⁽²⁸⁾。さらに同26年9月23日には彼は改進黨員に取り巻かれる中、同町で演説をした⁽²⁹⁾。

さらに、このような宣伝・啓蒙した地域の人々を糾合し、組織していった。例えば彼は明治26年2月1日、仙台に県下の「自由主義者」を集め、懇親会を催した。彼の開会趣旨により始められた同会には57名が参加した⁽³⁰⁾。

以前からのジャーナリストも続行した。明治26年1月28日付の『自由新聞』（仙台）の社告によると琢治は同社の「仮役員」となっている。また同紙にて自ら健筆を振るっている。特に明治26年1月15日の論説では青年時代から培ってきたところの「東北主義」（東北民奮起論）を「東北に於ける自由主義」と題し、次号にわたり主張した。この論文において重要なことは「東北主義」の幅が広げられたことである。つまり単に東北の振興を願うだけでなく、九州等も含めた「自由」の同士と共に行動しようというものである。そうした考えは彼が若きころ（特に上京前）に持っていたところの東北（自分の地域）の繁栄・再生を願う「東北主義」とは異なる。それは彼だけが考え出したものとは思われない。重要なことはこうした思考がとりわけ上京以降に主張されていることである。それは許容力があり、「権利自由」を校是とする学校の生活、あるいは学外のさまざまな校友などの結果である。

その後、彼はますます語気を強めて、「伊藤内閣の現在未来」⁽³¹⁾といった論説で藩閥内閣打倒、代議政治実現をめざす。

そして以上のような実績が認められ、このころ、琢治は明治法律学校々友として推薦をされたのである。

だが彼は次の県議会議員選挙には立候補しなかった。そしてジャーナリストの傍ら明治27年

には朝鮮国を視察して歩くなどした。

ところで正確な時期は不明ながら、同29(1896)年ころ彼は自由党本部に勤務することとなった。そして彼は学生のころから知り合いの大同団結論主唱者の後藤象二郎、あるいは党首の板垣退助の下で本部事務に携わった。特に『自由党々報』の編集に当たったのであるが編集事務だけではなく、自己の主張も書き綴った。主なものは以下のようなものである。「救済費と進歩党」(第115号、明治29年8月25日)、「進歩党機関の乱調」(第122号、同年12月10日)、「青年政治家の責任」(第140号、同30年9月10日)、「東北同盟会の合同交渉書を読む」(第146号、同年12月10日)

また郷里で催される自由党宮城支部総会や自由党東北青年大会等々に出張し、党勢の拡大に尽力した⁽³²⁾。

こうした実績をもとに佐藤琢治は明治31(1898)年、宮城県第4区より衆議院議員選挙に出馬した。やはり今度の場合も他の候補者と壮絶な選挙戦を繰り広げた。その模様はとりわけ『仙台新聞』の反「佐琢」批判から読み取れる。だが彼は当選した。代議士就任後、北海道の開発等を主張し⁽³³⁾、精力的に活動するが明治35(1902)年12月3日、40歳にて病死した。後に生家の近くの檀那寺養雲寺に河野広中筆の墓碑が建立された。

ところでこの項を終えるに当たって、次の2点を追記しておきたい。ひとつは地域の、とりわけ民党運動における明治法律学校関係者の活動ぶりである。このことに関してわたしもかつて『明治大学百年史』第3巻(通史編I)において多摩の鎌田訥郎や浦和の高橋安爾(出身は宮城県)らを例に紹介したことがある。この宮城県の場合、前記した者の内、最も著名であるのは岩崎惣十郎である。彼は自由党系であるが、それでも「宮城県有志懇親会」の会主となるなどして地域の民衆運動をまとめようとしている⁽³⁴⁾。また前述した「自由主義者懇親会」は佐藤琢治が呼びかけたものであるが、三島駒治(注13参照)東京出発直前という多忙な中、駆けつけている⁽³⁵⁾。彼らの政治活動は明治法律学校を強く意識したものあれば、ないものもいた。しかし、いずれにしてもなんらかの形で、前述した同校の校是・方針・校風は付いてまわっていた。また彼らが周りを見渡せば明治法律学校関係者が少なくなかった。

もう1点は地域における自由党と改進黨との関係である。それは確かに選挙戦等では激しい死闘を演ずる。すでにみた佐藤琢治の県会議員と衆議院議員の両選挙の場合もそうであった。しかし例えば琢治と首藤陸三の関係はどうか。すでに述べたように後者は前者の所属した自由党員ではなく、改進黨に所属し、県会議員や衆議院議員を勤める⁽³⁶⁾。だが、両者は「金華倶楽部」を結成する⁽³⁷⁾など、政治的交際も少なくない。また明治26年1月28日付『自由新聞』(仙台)も2人の出身地の登米町の政況について、自由・改進黨両党の「親交」ぶりを伝えている。この両者の関係については従兄弟同士であること、あるいは登米という同一地域で票田を分別しているのではないのかということが交友関係維持の理由としてあげられなくもない。しかし両陣

宮の交流を示す類例は少なくない。例えば『民報』第9号によれば明治23年8月23日に仙台市にて宮城県下「進歩主義者懇親会」は草刈親明（自由党）が会主総代、首藤陸三（改進黨）が議長を勤めた。それにより「同進倶楽部」の創立が決議された。

むしろ琢治にとっては河野広中が自由党から分派して「東北同盟会」を結成した一件の方が衝撃的であった⁽³⁸⁾。それは彼らを含めた東北の民権関係者は明治11年の「東北有志会」集合以来、ひたすら東北七州自由党の結成をめざしてきたからである⁽³⁹⁾。とりわけ琢治はそのことを強く主張していたことはすでに述べた。また在京代議士らは自由・改進黨関わりなく「東北倶楽部」を結成し、東北の団結を誓っている⁽⁴⁰⁾。こうしたことから地域における民党的運動はかなり早い時期より、「上から」の理論により展開される度合いよりも地域論（後の地域利害論とは異なる）に基づくものの方が多大であったといえよう。

まとめ

本稿では近代初期における地域の青少年が何のために、どのようにして勉学をし、そして高等教育をめざしていくかということ、やがて高等教育機関に入学してどのように学生生活を送るのかということ、さらに修了（もしくは退校）後、どのように学業を活用していくのかという3点について追ってきた。これらの解明のために時々、私（筆者）の学生・高校教師時代の体験をおりまぜてみた。

具体的には現在の宮城県の最北東部の武家の次男に生まれた佐藤琢治が地域（登米、次に仙台）の中でどのように育まれてきたかということ、彼の個人的事情に触れつつも主に地域の状況との関連から追求した。そして次に彼がなぜ上京するのか、なぜ法律学修得をめざすのか、なぜ明治法律学校を選んだのか、さらに在学中どのように活動したのかということを探求した。その後、彼は宮城県に帰りジャーナリストの傍ら政界に進出したが、何をしたのかということを見極めた。

これらの結論については時折、各項の中で記してきたのでなるべく重複は避けたいが最後に第2図を用いつつ、ごく簡単に箇条書にしてみる。

1. 佐藤琢治は周囲の環境や条件、特に地域的なそれに恵まれることにより、個人的能力・個性を発揮しつつ、基礎的学力や中等の学力を身につけていった。
2. 彼が特に高等教育に進学しようする時、例えば学問分野や志望校等の選択に当たっては地域的なこと、現実的なこと、身近なこと、さらに日用的なことが判断の材料やきっかけとなった。
3. 上京後、彼はかなり学外に交友を求めた。最初は県人会的・親睦会的なものに交わっていたが、やがて教養的な研究会に力点を置く。そして文芸と政論折衷的な会、さらに政治

的な会に関わっていく。これらの活動は自らの思想形勢や将来の進路選択に直接的な影響を与えた。

4. しかし在学した学校（明治法律学校）のもつ方針や校風も間接的ながら本質的に、かつ多大な影響を与えた。

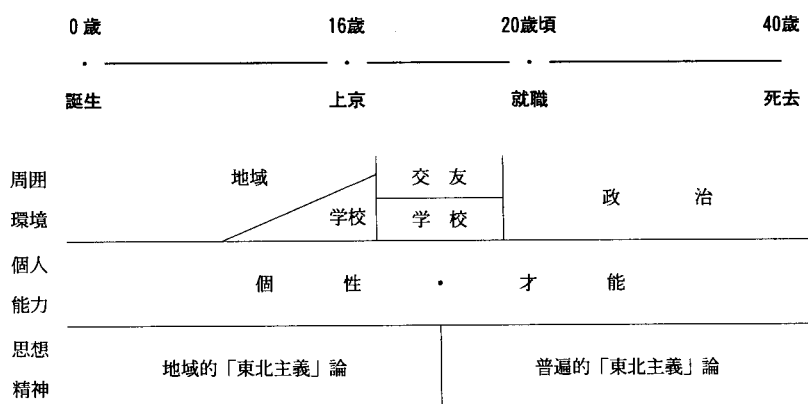
5. 彼の精神・思想は一環して「東北主義」にあった。それも当初は地域的な振興論にとどまる程度であったが、やがて全国的なそれへと普遍化していった。それは在学校の方針・校風、学外者との交友、所属団体における活動といった主に上京後の出来事にかなり影響されたものである。

なお明治法律学校はかなり早い時期、つまり開校の翌年（明治15年）には校友を設定し、その後、校友会およびその地方支部結成に力を入れていく。そうして設立した地域（地方）の校友会の実態解明、あるいは学校と地域校友との関係究明は今後の課題である。

本稿は一応、完結のような形をとっているが、まだ未完である。執筆枚数の関係で区切りをつけただけである。冒頭にも述べたように本稿は同時期のもうひとりの明治法律学校生を登場させ、佐藤琢治と比較しようという、いわば比較人物研究的なものを試みているからである。そのもうひとりの人物とは宮城県に隣接する山形県天童市出身の佐々木忠蔵である。この人物について、私は明治大学『学園だより』第224号（1993年11月15日）で簡単に紹介したが、もう少し詳細に考察し、『明治大学史紀要』第12号に掲載する予定である

本稿の作成に当たっては宮城県登米郡登米町鈴木一成氏はじめ多くの方々にお世話になった。深く感謝いたします。

第2図 佐藤琢治の経歴図



(注) ・「周囲、環境」力の方が「個人能力」より比率が大きい。
 ・「周囲、環境」欄の「交友」と「学校」の比率は前者の方がやや大きい。

注

- (1) 作成時期不明、登米伊達家文書、東北大学附属図書館蔵。
- (2) 現在の当主は佐藤恒夫氏である。
- (3) 後に仙台で経史、東京で英学修業後、帰郷し登米校等の訓導となった。『東北日報』明治25年4月1日。
- (4) 登米校は明治6年6月に寺池村小学校として開校し、やがて登米村第一小学校、次いで凌雲小学校と改称された。そして同12年に登米小学校となった。
- (5) 「佐藤琢治履歴」、登米町鈴木一成家文書。
- (6) 続「仙台人名辞書」刊行会『仙台人名大辞書』、昭和8年2月。
- (7) 今泉寅四郎『宮城県人物誌』、明治42年2月、昭和53年3月歴史図書社復刻版。
- (8) 『陸羽日々新聞』明治14年3月21日。
- (9) 前同紙。
- (10) 「碩儒国分平先生逝く」『宮城県教育雑誌』第55号、前出『仙台人名大辞書』、明治32年6月14日没。
- (11) 前出『仙台人名大辞書』。
- (12) 前出『宮城県人物誌』では明治16年ころ、東京遊学の仙台出身者を約1000余人としている。
- (13) 仙台にはじめての法律専門学校・東北法律学校ができるのは明治33年である。明治法律学校卒業生の三島駒治が母校の教育を参照して創立した。『三島学園創立五十周年史』より。
- (14) 『民報』第9号、登米町『登米町誌』第3巻 平成4年3月。
- (15) 明治16年より、以上は佐藤憲一「宮城県の自由民権運動」『宮城の研究』6参照。
- (16) 明治13年2月1日より入校許可。
- (17) 明治25年『校友規則並表』、明治大学図書館蔵、前出『仙台人名大辞書』。
- (18) 明治18年『校友規則並表』、明治大学図書館蔵。
- (19) 色川大吉「明治十七年読書会雑記について」『文学』Vol. 27。
- (20) 田原慶吉『山口熊野君略伝』明治40年4月、山口熊野頌徳碑建設委員会。
- (21) 『自由党々報』第138号。
- (22) 「三島通庸文書」、国会図書館憲政資料室蔵。
- (23) 『陸羽日々新聞』明治15年10月2日。
- (24) 明治大学歴史編纂事務室蔵。
- (25) 板垣退助監修『自由党史』下、岩波文庫版。
- (26) 宮城県議会史編さん委員会『宮城県議会史』第2巻 昭和49年3月。
- (27) 『絵入実業新聞』明治25年10月14日・16日・26日。
- (28) 『郵便報知新聞』明治24年9月5日。
- (29) 『自由党々報』第46号。
- (30) 『自由新聞』(仙台) 明治26年2月28日。
- (31) 前同紙 明治26年2月3日。
- (32) 『自由党々報』第134号・第147号。
- (33) 前出「佐藤琢治履歴」、佐藤琢治稿「北海道農工銀行急設の必要」『政友』第5号。
- (34) 『自由新聞』(仙台) 明治26年2月3日。
- (35) 『時論』第1号。
- (36) 登米町史編纂委員会『登米町史編纂資料集』第6集 昭和44年3月、前出『宮城県議会史』第2巻。
- (37) 『民報』第12号。
- (38) 前出「東北同盟会の合同交渉書を読む」。
- (39) 森田敏彦「東北七州自由党の結成と憲法起草運動」『歴史評論』№415。
- (40) 『仙台新聞』明治31年10月6日。